

新任教師として学んだこと

力 丸 栄 作

1. はじめに

私が教師を目指したきっかけは、大きく二つある。一つ目は父の影響である。父は高校で英語を教えているのだが、その一方で世界史の知識も深い。そのため、父は私が小さいころから、夕食のときに色々な世界の歴史の話をしてくれた。「アレクサンドロスはこの人だ」とか、「大航海時代っていうのは」とか、高校の世界史の教科書に載っているような話が、幼い私にはおとぎ話のように聞こえたのである。「勉強」というのは、真面目な固いものではなく、楽しいものなのだ。このような考えがいつしか、私の心の底に刻み込まれていったのだと思う。これが、私が社会科の教師を目指すようになったきっかけである。二つ目は大学生活である。私は中学、高校となかなか自分に自信を持てない生活が続けてきた。特にクラブ活動では自分が思うように取り組むことができず、辛い日々を過ごしたのを覚えている。教育関係の論文でよく取り上げられる、いわゆる「自尊感情」は比較的低かったのではないだろうか。しかし、大学に入って始めた登山が私を大きく変えてくれた。今まで何もできなかった自分でも、頑張ったらできるではないか。そんな経験を積み重ねる中で、次第に自信を持つことができたように思う。この経験が無ければ、私は教員採用試験に合格することはできなかっただろう。大学で得たアウトドアの経験を、将来教職で生かしたい。そして、何らかの形で、自分に自信を持てない生徒の背中を押してあげたい。この思いが、教職を目指す気持ちを強く後押ししたのである。

さて、ここから新任教師としての経験を書いていくが、1年と9か月の間で感じたことを書こうと思う。というのも、私は大学院の1年生で兵庫県の教員採用試験に合格し、次年度から働くことになったからである。大学院の2年生時には、昼は県立高校の教師、夜は大学院生という不思議な生活を送ることとなった。そのため、少し変則的な書き方になってしまうが、ご了承いただきたい。採用の1年目は1学年の学年付き、2年目である現在は2学年の担任として、奮闘しているところである。

2. 学校生活について

(1) 学校について

私は兵庫県立舞子高等学校で平成27年の4月から勤務している。住宅地の中にある学校で、生徒の様子も比較的落ち着いたように思われる。初年度は特に学校の仕組みに慣れることに苦労した。書類の起案の回し方、授業変更の手続き、成績処理の方法など、どうしたらよいか全くわからず、4月は心が折れそうになったのを覚えている。また、初年度は1学年の学年付きとして、主に学年教務を担当していたので、科目選択や考査後の成績に関する資料作成やデータ処理も非常に大変だった。このように、初年度は分からないことが多く、その一方でやり遂げなければならない仕事が多い。そのため、周囲の教員との連携が大切になると痛感した。私が何とか初年度を乗り越えることができたのも、本当に恵まれた学年に出会えたからであり、何でも親身に聞いてくれる指導教官に出会えたからだと思う。自分の分からないことは周囲の先生に聞いて、少しずつ自分のできることを増やしていったのが初年度であった。人とのつながりの大切さをここまで実感できたのは初めてである。

また、教師として働くようになってから、大学時代に抱いていた教師像とのギャップも感じた。大学時代には教師は授業中心のイメージがあったが、実際に働いてみると授業は教員の職務の中のほんの一部に過ぎない。学校を動かすために、授業以外にも本当に色々な仕事があることに驚いた。特に初年度で困ったのは教材研究の時間が限られているということだ。授業で話す内容はある程度準備することができたが、教材の内容を深めたり、入試問題を解いたりする時間は学期中になかなか確保することができなかった。そのため、長期休暇のタイミングで、自分で取り組むことを決め少しずつ知識量を増やすことが大切だと感じた。

(2) 学年について

次に、学年について述べたいと思う。私は舞子高校の特に42回生と関わる機会が多いが、その中で感じたのは生徒の「素直さ」と「幼さ」である。勤務校の生徒は、人懐っこく、教師の話をしっかりと聞く生徒が多い。その一方で、行動が受動的で、自分で考えて動く者が少な

いことも指摘されている。また、素直な生徒が多い一方で考えが浅い生徒が多いのも事実である。指導の際も、怒られる理由を理解できない生徒もあり、やってはいけないという理由の根本から話さなければならないこともしばしばである。また、ちょっとした理由で欠席したり怪我をしたりする生徒も多いのも課題として挙がっている。

以上の問題点を踏まえて、私は高校生活を通して彼らに「自律」できるようになってほしいと考えている。現状では幼さがあるかもしれないが、クラスでの生活や、クラブでの活動を通して、少しずつ自分自身をコントロールできるようになれば、社会に出てから彼らはきっと活躍できるはずだ。では、そのためにどのような活動をしていくべきなのだろうか。この点に関しては、未だに答えが出ていない。特にクラス経営は現在も苦難の連続である。しかし、一つ答えに近いものがあるとすれば、それは生徒と常に双方向のコミュニケーションをとることだと思っている。教師が一方的に話すだけでは、絶対に生徒の頭に物事は入らない。授業も、クラブの指導も結局は生徒に対して「君はどう考えるの？」と聞いて、様々な物事に対して自分の考えをもつ習慣をつけてやるのが大切だと感じている。

3. 学習について

(1) 学習について

学習については2つの側面から考えたいと思う。1つは教科担当からの視点。そして2つ目はクラス担任からの視点である。

(2) 教科担当の視点から

現在、私は主に2年生の世界史A・B、1年生の現代社会を担当している。社会科は伝える情報量が多く、一方的に説明する授業をしがちだと言われるが、2年目になった今も授業作りに苦心している。ただ、授業をしていく中で生徒が関心を持って聞いていると感じたことも少なくない。どんな時に生徒がしっかり聞いているか思い返すと、それは私自身が楽しいと思ったり、大切だと思ったことを伝えているときである。言葉に魂がこもった時、人はその話をしっかりと受け止めるのではないだろうか。近年、アクティブラーニングの大切さが指摘されている。しかし、何をもって思考がアクティブであるとするかは定義づけが非常に難しいのではないだろうか。たとえば班別で調べ学習を行い、教室の前に出てきて発表したところで、生徒が受け身で発表しているのでは意味がない。逆に、講義式の授業でも生徒が積極的に話を聞き、ノートを書いているのであれば、それはアクティブなのではないだろうか。私は、結局のところ授業

は教材研究が一番だと思う。それは単に知識を整理するだけでなく、小ネタであったり、雑学であったり、人間ドラマを語ったり、教科書で表面的に扱われている内容をドラマティックに伝えることが教師の役割なのではないだろうか。劉邦を知る中でリーダーシップ論を学び、ヒトラーを知る中で一党独裁の危険性を知る。帝国主義を学ぶ中で現代社会の南北問題に思いをはせ、ホメロスの「イリアス」を知る中で男の愚かさを学ぶ。社会科の授業は知識の受け売りに終始してはならない。また、決まりきった答えを答えるだけの授業になってはならないと思う。歴史や現代の抱える問題を知る中で、物事の考え方や、自分自身の生き方を考えるきっかけをあたえる授業をつくっていきたい。

さて、先ほどアクティブラーニングについて取り上げたが、私は大がかりなものではなく、教師がしっかりと発問をなげかけ、その発問に対して自分自身で考える機会を設けることが大切なのではないかと思う。結局のところ、授業は教材研究と質の高い発問が大切になるのだと思った。

(3) クラス担任の視点から

クラス担任の視点から考えると、学習習慣の確立がやはりメインとなってくる。勤務校の生徒はテスト前に少し勉強をする程度で、通常時の勉強習慣はついていない。2学期も終わりを迎え、進路担当からは1日3時間以上勉強するように言われているが、なかなか実現できていないのが現状である。生徒からの意見を聞いてみると、課題が多すぎると聞くことが多い。そのため、色々と手が回らず、最悪の場合答えを書き写して提出する生徒も残念ながら見受けられる。つまり、勉強習慣を確立できていない生徒と、勉強の取り組み方が分からない生徒が多くいるというわけだ。教師側は、勉強はすればするだけ伸びると考えてしまいがちである。だが、いきなり勉強時間を伸ばすのには限界がある。マラソンを走りきるために、いきなり42kmトレーニングで走る人がいるだろうか。まずは1km、そして5km、そして10km…というようにステップアップをしていく必要があると感じている。今のままではマラソンを走りきるどころか、トレーニングの一步を踏み出すこともできていない。一日の取り組む勉強量を少なめに設定し、少しずつ増やしていくことが必要になるだろう。

このような悩みは、学校によって様々だと思う。とにかく難関校に合格するにはどうしたらよいか考える先生もいれば、生徒を椅子に座らせるにはどうすればよいか悩んでいる先生もいらっしゃるだろう。大切なのは、その学校の生徒に何が足りなく、そして何を求めているか寄り添って聞いてやることなのだと思う。担任が動かなければ生徒は動かない。経験を積み、色々な先生

方の話を聞く中で、生徒に対して適切な助言ができるようになりたい。

4. クラス担任について

2016年度に初めて、2年生のクラス担任となったが、本当に色々なことがあった。1学期は毎日の仕事をこなすのに精いっぱい、生徒一人一人の顔を見ることさえできていなかった。2学期に入り、少しずつ表情を見る余裕が出てきたが、まだまだ手一杯なのには変わりが無い。

書き始めるときりが無いが、クラス担任をする中で一つ大切だと思ったのは生徒の話を聞くということである。担任になると、どうしても生徒に何を伝えるかを考えてしまいがちだが、一方的に話すだけでは伝わらないと感じた。相手に伝えるには、まず相手の話を聞かなければならない。それはどんな些細なことであっていいと思う。どんなアイドルが好きだとか、昨日のテレビは面白かったであるとか。それを続けることで、家での問題であるとか、自分の内面を話始めるのである。

このような信頼関係ができてこそ、指導を入れるべきだと思う。また、時に生徒は教師に対して反発することもある。その時もただ力で押さえつけたり、怒鳴ったりするだけでなく、冷静に何に対して不満に思っているのかひも解いてやる必要があると感じている。その不満の部分について、教師に否があるのであれば謝るべきだし、生徒に否があるのであれば気づかせてやるべきなのである。言うことは、もちろん言うべきであるが、この謙虚な気持ちを忘れないようにしたいと思う。

5. 部活動指導について

(1) 演劇部について

現在、私は演劇部の顧問を担当している。中学、高校、大学と演劇の経験は無く、未経験で演劇部の顧問となったが、生徒と共に劇を作る中で、徐々に知識が増えているのを感じている。演劇部の顧問として、活動を通して学んだのは共通認識の大切さだ。どんな作品を作るか、どのように表現するか、スケジュールはどのように組み立てるか。このような内容をトップダウンで生徒に下すのではなく、生徒と共に頭をひねりながら考えることが大切なのと感じた。人から言われたことを淡々とこなすだけではやりがいを感じることはできない。やらされているだけだから、責任も薄くなる。でも、自分で考えた事は、自分で考えたからこそ、自分で責任をとらなくてはならない。そして、それをやりきることで強烈な達成感を得ることができる。考え、行動に移し、そして修正する。この思考プロセスは授業だけでなく、部活動に

も重要だと感じているし、授業よりも部活動の方が実践しやすいのではないだろうか。我々教師は、「スマートさ」や「成功」に目がいってしまいがちである。だから、一方的に指示を出し、生徒に行動させ、一つ一つを淡々とこなすという構造に陥りがちだと日々痛感している。勝利は確かに大切であるが、部活動はあくまで生徒の人間性を高めるために行う教育活動であることを忘れてはならないと思う。

また、部活動は生徒の逃げ場であることも最近になって感じている点である。特に演劇部の生徒は、少し感受性が豊かな生徒が多い。そのため、普段のクラスでの生活に疲れを感じるメンバーも数人存在している。でも、「クラブは楽しいから学校に行く」と言っている部員もおり、良い意味でクラブが彼らにとっての逃げ場になっているのだと感じている。クラブ活動を通して、自分に自信を持ち、少しずつ社会性を身につける中で、クラスに少しずつ馴染んでほしいと願うばかりである。

(2) 部活動全般について

部活動は自分の経験したものの担当になるとは限らない。しかし、経験したことのない部活動になったからといって放り投げるのは少しもったいないと感じている。私自身、演劇部の担当になった時は少し戸惑ったが、活動を全体的に見ていく中で自分の経験スポーツが生かせることに気付いた。中高と続けたアメリカンフットボールからは練習の組み立て方。特にオフェンスのプレー合わせが演劇に応用できると感じた。また、一日の練習のスケジュールの組み方も応用することができた。そして、大学で経験した山登りからは長期的な計画を立てる能力が応用できると感じた。様々なりスクを考えながら、生徒と共に公演までのスケジュールを考えるのはなかなか大変だが面白いものである。生徒に色々聞く中でも、色々勉強になった点もあった。もしかしたら、経験のない部活動を担当する方が、新鮮で、新たな発見もあり、幸運なのかもしれない。事実、授業中の話し方を少し変えようと思ったきっかけも、演劇にある。

6. 最後に

「教師の資質について、あなたは何が必要だと思いますか?」。教員採用試験で聞かれた内容である。当時を思い起こせば、確か「自主性」と答えたような気がする。生徒に課題解決を求めるのであれば、教員にもそれが求められるはずだと。さて、今同じ質問をされたらどう答えるだろうか。恐らく、「無駄を大切に作る心」と答えると思う。

中学受験を経験し、中高ではクラブ漬け、大学でもクラブ漬け、大学院では論文と教員採用試験対策に追われ

る毎日を経験してきた私にとって、「無駄」という言葉は一番嫌いな言葉だった。その時間をトレーニングに当てたり、計画を練る時間につかったり、勉強に充てるべきだと考えて生きてきた。これで正しいと思っていたし、遊んでいる人を冷めた目で見る自分を悪くないと感じていた。

しかし、実際に高校で働き始めると、本当に色々なことが求められると感じた。授業の雑談はツカミであって、実は重要であること。全く関係がないと思われた雑談が、授業内容に結びついたときの快感はなかなかのものである。また、倉庫に蜂が出たら駆除しなければならないこと。球技大会や、かるた大会などのイベントごとに写真を撮ること。しかも、学年通信に写真を載せるため、ベストアングルで写真を撮らないといけないこと。部活動で部員の代打として、少年の役をやらざる得なかったこと…などなど。思い返せば、自分が採用試験のために準備してきたことは教員生活に必要なスキルの本当に氷山の一角でしかないことを最初の一年で痛感した。教育の理論や、専門書もちろん大切なのではあるが、それだけでなく、もっと幅広いことに興味を持って、引き出しの多い人間にならなければと感じている。所属している学年の副主任から、「有益な無駄」が大切なのだとお話をいただいたことがある。教師が遊び心を持たなければ楽しくないし、教師が楽しまなければ生徒はついてこない。もし、大学生で教員を目指す人から「どんなアルバイトを学生時代にすべきですか？」と聞かれれば、とにかく色々なアルバイトをしろと言うと思う。もちろん、塾講師などをして、授業慣れするのもよいと思うが、その他の色々な「無駄」と思われる仕事をしていると、生徒に話してやれることがきっと多くなるはずである。社会の教員になるのであれば、なおさら授業で話せるネタは増えるはずだし、進路指導の面から見ても、自分の経験で話せる部分が増えるはずである。引き出しの多い人間になるには、膨大な時間がかかるが、ゆっくり知識を重ねて、豊かな人間になりたいと考えるこの頃である。

関西学院の校章は三日月であるが、それには新月が次第に膨らんで満月になるように絶えず向上したいとの願いが込められている。今の私はまだまだ満月にほど遠いが、いつか綺麗な満月になれるよう、自分自身の引き出しを増やしていかなければならないと感じている。そして、月は自ら光ることはできない。今、教師として働けているのも、家族や、同僚の先生方や、生徒たち、そして学生時代にお世話になった先生方のおかげであるとひしひしと感じている。

最後になりますが、このような文章を書く機会を与えていただき、本当にありがとうございました。自分自身

の今までの歩みを振り返る、とても良い機会となりました。教職を目指す上で様々なサポートをしてくださった柏原さんをはじめとする教職センターの皆様方、そして小谷先生をはじめとする大学院の先生方、本当にありがとうございました。良い意味で「無駄」を大切にし、授業も、クラブも大切にできる、そんな教員を目指して、今後も研鑽を積んでいきたいと思います。

(りきまる えいさく・兵庫県立舞子高等学校教諭)